

佳作

## 頑張れば感動

鹿児島県 鹿児島市立八幡小学校六年 福田 美空

「この中で、一輪車に乗れる人。」

先生が言った。二年前のこと。運動会の表現発表で一輪車に乗ることのできる人を先生が探していた。一クラス五人、選ばなければならなかった。私のクラスは、四人が手を挙げた。まず四人は決まった。あと一人、一輪車に乗れる人を選ぶことになった。私は一輪車に乗ることはできたが、自ら手を挙げる勇気がなかった。なぜかというと、条件があったからだ。その条件は、「空中乗りができる」ということだった。私は、乗ることはできるが空中乗りはできなかった。そのことを考えると、「手を挙げない方がいいのかな？」という気持ちが大きくなった。その時、

「先生、美空さんは一輪車に乗れますよ。」

という友達の声が聞こえた。それを聞いた先生は、そして、とうとう空中乗りができるようになった。できるようになった時は、とてもうれしく、お父さんもお母さんも一緒に喜んでくれた。できた日は、雨がふっていたけれど、私の心は晴天だった。できたしゅんかん、「今まで頑張ってきてよかったな」と思った。

思えば、昔から頑張った時には良い結果が待っていた。自転車に乗れなかった時、練習して練習してやっと乗れるようになった。最初は水につかることさえこわかった水泳も、少しずつ勇気を出して真けんに取り組んだことで、一つずつ級が上がっていった。こんな風に頑張れば、良い結果にたどりついて、感動できる。これからも、いろいろな事に挑戦し、頑張っていきたい。

私に

「じゃあ、美空さんをお願いしてもいい？」  
と言った。私はあわてて

「でも、空中乗りができません。」  
と言ったが、先生は

「それでも、もう一輪車に乗れる人は他にいないから、とりあえず美空さんに決まりね。」  
と言って、私が選ばれてしまった。

私は悩んだ。一人だけ空中乗りができないのはもちろんいやだったし、くやしかった。でも、「悩んでいるだけではダメだ」と心のどこかに火がついた。その日、家に帰って、すぐお父さんとお母さんに相談した。私は、どうしても空中乗りができるようになりたいと。すると、お父さんが、

「よし、分かった。一緒に練習しよう。」

と言ってくれた。なんと一輪車も買ってもらい、その日から毎日、練習が始まった。

最初はどうしても、「こわい」という気持ちがあった。でも何度も何度も挑戦した。始めに足を乗せるときは角度やバランスの取り方のアドバイスもあって頑張りが続けた。お父さんは雨の日も練習につきあってくれた。少しずつ、感覚が分かってきた。